



# 沖

俳句雑誌[おき]

12月号

沖 発行所

# 樹が鳴けり

能村 研三

この一年

蟻螂は祈りのさなか枯れきざす

浦安

秋寂びてべかの名残りの湯屋二軒

十三夜吟行・アイリンクタワー

江戸川にうねりとがりや十三夜

東京の背柱に富士月名残

本年も早いもので、この一年を振り返る時期に來てしまった。今年の「沖」は何と言っても最大の行事は五月の五百号記念。辻美奈子新編集長の元に二百八十頁に及ぶ記念号を発行し、会員同人内輪の会であったが、東京スカイツリー開業間もなくで賑わっていた浅草ビューホテルで、全国から多くの会員同人が参集し、記念大会を開催することができた。

また今年には公務が少し楽になったために、俳人協会の札幌での講演を皮切りに、九州、関東、東北のプロック別の俳句大会の他に、館山、東葛、西東京、南信濃、長岡、大分の六支部の指導句会に行き、日頃お会いできない会員の方々と親しくお話ができたこともうれしかった。ただ高山で行われた中部大会を兼ねた同人研修会には、直前に左足の肉離れをおこし急遽行くことができなくなり、関係者の方にご迷惑をおかけしたが、自宅のFAXでのやりとりで選句、講評をさせていただいた。ま

丘上は練兵場址霜枯れて

白神山地

樨黄葉櫓を漕ぐやうに樹が鳴けり

白神の樹を擦る音は雪を呼ぶ

極上に粧ふ山は北の雄

お岩木は孤山の雄や秋闌ける

白神は落葉乱舞の風騒ぎ

だ完治はしていないものの、今月の白神山地で行われた東北大会には参加することができた。これからは今月の末静岡、長岡、大分に続けて訪問することになっている。

今年のような「沖」記念の年にはいつも良いことがあるが、今年は同人の上谷昌憲さんの俳人協会の俳句大賞から始まって、広渡敬雄さんの角川俳句賞の受賞、さらには先月、俳誌協会の「編集賞」を「沖」が受賞することになり授賞式が東京で行われた。先師登四郎は常日頃から良い結社誌を作ることを提唱し続けてきたので、今回の受賞は喜んで貰えたのではないかと思う。この授賞も今までの歴代の編集に携わった人達、そして今回の五百号の編集内容が評価されたものである。

さて、そろそろ来年の予定が手帳に記載される頃でもあるが、本年訪ねることができなかった支部には、何とか機会を見てお訪ねしたいと考えている。

# 蒼茫集



苔の中

宮内とし子

桔梗の苔の中の無菌室  
秋思ふと三面鏡の開いてをり  
小児科の受付灯すからす瓜  
豊の秋埴輪の細目安らけし  
出格子の隅に色添ふ唐辛子  
一葉落つ帰りの切符確かむる

水ゆくごとく

辻美奈子

蛇穴に草叢を水ゆくごとく  
心臓の重さに石榴熟れぬたる  
たましひに風よくとほる花野かな  
天高き日の缶入りのハイボール  
自転車に鎖の鍵やかからすうり  
冬瓜に置くかなしみの滑り落つ

曼珠沙華

菅谷たけし

秋の雲豹にも鯨にも自在  
風揺れの草にふるへて糸とんぼ  
地も天も屏風返しの秋彼岸  
曼珠沙華同窓会はいつも今  
村起しめくいつせいの曼珠沙華  
誰に捧ぐ曼珠沙華てふブーケ咲き

武者構へ

千田

敬

秋水に漱ぎしあとの耳聡し  
虫時雨ぼくも泣き虫お仲間  
粧うて鋸山は武者構へ  
登高高台や遠き日の見ゆ師も見ゆる  
朝市に華と咲きたる鷹の爪  
一位彫素風ぐるみに彫り上げて

花野 大畑善昭

どこからか馬追の来て家族の灯  
どよめきは青空にあり曼珠沙華  
吾亦紅電波を受信してをるか  
幼な子を花野の精として放つ  
菓子箱に絵筆鉛筆通草の実  
月夜茸しこたま取つて捨てる破目

大切な 酒本八重

いきさつに一切触れず秋裕  
目に見えぬものに畏怖あり水澄めり  
透明な傘にしぐれの色を見き  
いくとせの恙身を抱く曼珠沙華  
かすかなる飢糸をよろしと穂絮とぶ  
木の葉降る降る仲間とは大切な

曼珠沙華綴り 北川英子

蒼天やはたはたはたと啄まれ  
活断層添ひかも曼珠沙華綴り  
立ち竦みゐて蛇穴に入る始終  
水音残して紅葉山つひに闇

洛中をひたすら鮎の落ちゆくも  
標高の三段ぼかし山装ふ

ありやあり 千田百里

吊されて軒に威を張る唐辛子  
コスモスに長身の憂さありやあり  
澄む秋の語尾ながく曳き朝市女  
陣屋とや素風の出入口あまた  
稲びかりの刹那ブラックホールかな  
秋深む茶粥の膜を吹き寄せて

推理 秋葉雅治

波の穂に光芒そそぐ良夜かな  
山動くかに霧晴るる只見線  
竹伐つて空のまる味をとり戻す  
パズル解くつるべ落しに急かされて  
文豪の推理東京ステーションホテルや駅の秋ともし  
鬼の子のオーダーメイドらしき蓑

地球儀

広渡敬雄

自転車の照らす闇よりちちろ虫  
笹山の音の明るき初しぐれ  
水底に赤き蟹ある冬はじめ  
弓なりに浸る熊笹冬の水  
地球儀の南極白しクリスマス  
むささびの翔け来る闇の艶めける

秋 爽

田所節子

六舟の鵜籠並ぶ爽気かな  
自在鉤吊る爽涼の太き竹  
かき氷ふつと視力の若返る  
けふ処暑や琥珀の酒に氷鳴り  
稲刈機働き日差しむせつたし  
秋爽の墨痕太き句座案内

帰燕以後

松井志津子

大灘の紺の定まる帰燕以後  
天気凶の全国晴れや葉鶏頭  
稲びかり猫の野生の曝さるる

アリバイなし月の兎に招かれて  
紅葉酔ひせし夜の糊の利きし夜具  
いわし雲齡しづかにのしかかる

初秋刀魚

遠藤真砂明

俺よりも生きよと秋暑見舞かな  
はらわたの苦し旨しと初秋刀魚  
水吸つておのれ浄めて曼珠沙華  
命惜し明けの霧笛の遠鳴りに  
ぶつちぎれ飛びに野分の波がしら  
叫喚の空の真澄に鴟の費

新 走

森岡正作

風呂敷のはんなり解くる秋彼岸  
訛解く飛驒には飛驒の新走  
屋の虫鳴かせ陣屋の荒蕪  
胴上げのやうに響もす曼珠沙華  
牛膝付けて世継ぎの帰りけり  
札所への道秋耕の燃やす煙

激湍 藤原照子

銀漢と水車の音と響きあふ  
まつはれる蝶も活けたき庭の萩  
新走りその名の山も愛しけり  
星月夜カーテンコールの掌の余熱  
大方は傾ぎて尾根の濃りんだう  
色変へぬ松激湍へ迫り出せり

サンダル 安居正浩

秋空に野生の疼く犀の角  
山影の広がつてゆく稲の花  
身に入むや藤村稿に朱の迷ひ  
白粉花の人待ち顔に日暮くる  
竜淵に潜み火星に水探す  
サンダルで祝はれにゆく敬老日

秋の夜 鈴木良戈

秋の夜の呟くやうな手紙書く  
露けしや父母の齢をすでに越し  
父母の声かも知れず雁渡し  
花終へし萩のトンネル風の道  
柿食べてまだもう少し生きむかな  
天高し素志をまとめて一本に

日輪 上谷昌憲

曼珠沙華日輪も薬張りにけり  
曼珠沙華その咲笑の声もたず  
稲妻の先端に触れ西新宿  
ストレスのぎつしり石榴色づけり  
目鼻なきマネキン笑ふ後の月  
秋思かな等間隔に貨車停まり

秋麗 河口仁志

秋麗や駅復元の赤煉瓦  
生身魂スカイツリーに連れ出さる  
駅弁の輪ゴム弾きて茸飯  
ベイブリッジ越え十月の婚礼に  
古稀祝ふもどり鰹のたたきかな  
処理場なき瓦礫の山の穴惑

露明り 溯上千津

黄瀬戸の疵月の兎と見立て撫す  
露明り郭沫若氏亡命居  
叶はぬこと馬刀葉椎の実拾へども  
鳩尾に秋水の音通夜帰り  
出して積み捨てず仕舞の秋袷  
再生医療の明暗表裏霧中かな

# 潮鳴集



午後の部

菊地光子

F Mに替へ午後の部の松手入  
跳箱に一段足すや罌雲  
小石ふむ路地のまだあり走り蕎麦  
流木に秋風つまづきやすきかな  
ひと粒に命たくはふ稲穂かな

誰もみな

栗原公子

水晶のごとき雨ふる秋はじめ  
黎明の満月白く透けてをり  
誰もみな遺されし人水澄めり  
風立つやさりさりと梨食みをれば  
神さまのふとゐるやうな秋夕焼

つつぱり棒

小嶋洋子

天袋はタイムカプセル屋の虫  
稲妻や家具を押へるつつぱり棒  
トタン屋根台風十七号と去ぬ  
まだシェフの見送つてゐる秋の風  
恐竜の声あぐ重機いわし雲

空に波

齊藤實

神楽殿隙なく閉ぢて冬隣  
病室の窓の開かぬ月見かな  
小悪魔を呑み込むやうや黒葡萄  
信号を待つ一分の冬隣  
空に波作り万羽の鳥渡る



# 沖作品



## 能村研三選

己が刻足らじと夜を法師蟬

市川市

荒井千瑳子

爽籟や紙で編みあぐパンの籠

声にして西鶴を読む良夜かな

沢村の速球永久に銀河澄む

給食の白衣ぶかぶか豊の秋

万葉より七夕の風寝ね惜しむ

雁来紅天にむかひて爪立ちぬ

悠久の銀河の濃き日旅ごころ

走り蕎麦打つ名水を惜しみなく

すぐこぼる零余子の蔓を風が訪ふ

胸像の心耳に聞こゆ法師蟬

武者小路実篤旧居水の秋

出立の力漲る帰燕かな

人間に子別れは無し鳥渡る

散骨を選びし人や星月夜

千葉

上田 玲子

静岡

東 良子

死ぬ時はふつと花野にまぎれたし

東京

関根 揺華

蚯蚓鳴くバリアフリーにある傾斜

竹の春土鍋に飯の炊き上り

爽頼や井戸水使ふ豆腐店

身の内に妬心の少し式部の実

風のまま気ままに生きむ新松子

下町の風となりけり猫じやらし

秋風の牛鳴坂をトラクタ一

星月夜航空尾灯咆哮す

束釣と船出さざめく鯨日和

鳥渡る武尊渡海の紺深め

銀漢や稽古弓弦の音冴えて

野分波駆けて巖を掴みたる

鬼灯や絶やしてならぬことありて

いぼむしり草の揺らぎと同じうす

深山より拾ひて来たる栗の艶

種なしのととのひすぎし黒葡萄

市川市

町山 公孝

千葉

石崎 和夫

岐阜

花田 心作

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研 氏

給食の白衣ぶかぶか豊の秋 荒井十瑛子

小学校での給食当番は、白衣に三角巾又は、帽子、マスクなどを着用することで、私服を汚す心配がない。そして白衣に袖を通すことに「より当番としての自覚と責任感を認識することが出来る。この句は「ぶかぶか」という擬態語を使うことにより、省略された中にも小学校低学年の身丈に合わないかわいらしさとけなげさが伝わってくる。荒井さんは学校の教師としての経験がある方のようなのだが、子供たちの健やかな成長を見守る温かさを感じられる。そしてこの句の出色は何と言っても「豊の秋」という季語を見つけたことである。

万葉より七夕の風寝ね惜しむ 上田 玲子

万葉集には百首を越える七夕の歌があるそう、そのほとんどは男女の恋の物語として詠まれている。牽牛と織女の二つの星が年に一度しか逢つたことを許されないと、という話は中国から伝わってきた話が

日本版としてミックスされて、彦星と織姫星の話として定着したのは、「万葉集」の時代で、万葉時代の人々は、自分たちの体験を遙かに超える伝説の世界に魅了され、それを何とか歌で表現しようと、様々な工夫を凝らした。上田さんは書家でもあるので、七夕の夜短冊に万葉歌を書いて楽しんだのだろう。

出立の力漲る 帰燕かな 東 良子

春に渡って来た燕は秋に南方へ帰って行く。夏の間に雛をかえし、九月頃群れをなして帰ってゆくのだが、燕から見たらその大空も、飛び立つと無限の空、果てしない空として映ることだろう。燕は太陽を目印として昼間、海岸線、山川の別に判別し、日本の主な山脈を越えて行くそうだ。一日に三百キロを飛ぶと言う。燕もいよいよ明日帰るとなると出立の力も入ることだろう。東さんが「沖」へ参加してくれた出立の思いとも受け取れる。

蚯蚓鳴くバリアフリーにある傾斜 関根 揺華

蚯蚓は鳴かないが、「じー」と聞こえるのは蟻蛄などが鳴いているのだ、と言われる。だから、蚯蚓鳴く、というのは、要するにそんな気がする秋の感じを言っている。この季語を句に付け合せたのが面白い。高齢者や障害者のために道路や建物は極力段差が生じないようにバリアフリーの傾斜を設けている。人にやさしい考え方である。

(以下略)